
あなたはあなたですか？

砂蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたはあなたですか？

【Nコード】

N4247Y

【作者名】

砂蔵

【あらすじ】

あなたの中のあなたをあなたは知っていますか？

それは知らなくてもいいかもしれないし

知らないやいけないのかもしれない。

人それぞれですからね。

わたし（主人公）の中のわたしを書いていくそんなお話し。

おきる

アナタハドコニイマスカ

ワタシハドコニイマスカ…

「おい！起きろ！遅刻するぞ！」

誰かが私を呼んでる

ああ、なんだ俺か

はいはい起きればいいんでしょー起きれば

『おはようございます…ふあっねむっ…』

「んなこと言ってる場合かよwwもう7:30だぞww」

『うつわあっ…まじ！？ 地味に急ぐことにする』

そんな感じで朝はいつも慌しい。

だって目覚ましか何回鳴っても止めるし

止めたことすらあんまり覚えてなかったりする。

朝は弱い。それが私。

そんな私はきつと多重人格。

でもそれは誰もがそれなんだと思う。それも私。

あいさつとか

「はあ…めんどくさい学校…行くまでが…」

『確かにw』

そんな会話を脳内でしながら

ただひたすらに自転車をこぐこぐこぐ…

学校の校門に先生とか野球部の男子が立ってて
そこに向かってふわぁっと挨拶をする

「おはよーございまーす…」

『おはようございますっ！！！』

そんなに元気に挨拶しなくても…

挨拶運動を強制される彼等や仕事だからの先生に
少しだけ同情しながら私は校門を抜ける。

学校到着。

同じく学校についた生徒達と交じりながら
自転車置き場に自転車をとめる。

「はあ… ついた」

いつも同じ光景、いつも同じ行動
当たり前なんだろうけど、やっぱり鬱陶しい。

いつもどおり

自転車を置くと鞆を肩にかけながら
教室へと足をすすめる

教室は4階…

「はあ…」

息がもれるほど体力がなく

教室にいくと脱力。

机に荷物を置いて

椅子に座って時間割り。

たまに「おはよう」って言われるから

『おはよう〜』とかえすくらいで

あまり言葉を交わすことはない。

朝の私はやっぱりぐだぐだだ。

はじめからそうだった訳ではないけれど

もう面倒くさくなってしまうているのだ。

当たり前の挨拶が、教室が、学校が。

やっぱり面倒くさい。

だけど時間は過ぎていく。当たり前のように…

ホームルーム

キーコンカンコン♪

キーコンカンコン…

「じゃあ朝のホームルームをはじめましょうね」

先生はもうおばあちゃんで

自分達と一緒に定年退職という形で卒業らしい。

この先生は嫌いじゃない。

むしろ好きな部類に入る先生だ。

一生懸命で、言葉がきれいで、ひたむきで純粋。

少し甘すぎるところが…まああれだが

自分のクラスが五月蠅いだけで先生に罪はない。

そう私のクラスは五月蠅い。

授業中でも、休憩でも、いつでもだ。

まあ、それがいけないことだというつもりはないし
自分自身そんな時期があつたから、否定できない。

きつと自由になりたいとか、縛られたくないとか
こうしないと仲間はずれにされるからとか、

さわいでたほうが楽しいし、楽だからとか

たくさん理由があるんだと思うと、まあ何もいえない。

もし「五月蠅い！」って自分が言ったとしても

きっと逆効果であることはわかっているし

自分に得がない。そう思ってしまうから何もできない。

きっと自分も混ざろうと思えば混ざれるその空間だが
混ざったらきつと色んなことを失う。そんな気がした。

先生は必死に「静かにしてください！」って言うから

なんだか心が痛む。もうすぐ定年退職なのに…なんだか可哀想と。

そんなことを脳内で考えていたらホームルームはおわる。

キンコーンカーンコーン♪

キンコーンカーンコーンっ…

友達

「狭山さんおはよう」

『ああ、おはよう三森さん』

中学から同じはずなのに、この子は
ずっと苗字そしてさん付けで私を呼ぶ。

どこか他人行儀なんだけど、

この子に呼ばれても違和感はない。

むしろそれ以外で呼ばれたらきつと椅子から落ちるだろう。

特に親友とかそんな関係でもないが、

この子には何か安心感を覚える。

もともとは友達の友達だったんだけど、
本の趣味が重なってそこから友達になった。

この子には真面目な話ができる。

それは、ただ都合がいいからという風にとれるのだろうか。

だけど、個人的にこの子が友達として好きだとそう思う。

何故…この子について語り始めたんだろうか自分は。

ふと我に返った自分は黒板の文字をノートに書き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4247y/>

あなたはあなたですか？

2011年11月17日12時21分発行